

8. イチジクの新しい病害「黒葉枯病」 (情報)			
[要約] 露地栽培イチジクの葉柄が黒くなり葉枯れを生じる障害は、 <i>Fusicoccum aesculi</i> Corda 菌による新病害で、「黒葉枯病」と命名する。			
研究室名	病虫研究室	連絡先	086-955-0543

## [背景・ねらい]

県南部の露地栽培イチジクに、葉柄が黒くなり葉が萎れて葉枯れ症状となる障害が発生したので、原因究明する。

## [成果の概要・特徴]

1. 症状は8月中旬頃から現れる。初め葉柄と葉身の境目又は葉柄の中央付近が茶褐色となり、次第に黒褐色ないし黒色に変色してやや細くなる(図1右)。その後、葉全体が萎れ、9月頃に落葉する(図1左)。葉以外での発病は認められていない。
2. 葉柄の病斑からは *Fusicoccum* 属菌が高率に分離される。分離菌をイチジク「蓬萊柿」葉柄基部に接種すると約10日後には有傷、無傷接種とも葉枯症状が再現され(表1)、接種菌が再分離される。
3. 葉柄病斑部の表面には黒色の分生子殻(図2左)を多数生じる。分生子殻は単生で頂部に孔口を有し、黒色、球形、直径124~352(平均221)  $\mu\text{m}$  である。分生子は無色の分生子柄上に内生出芽・フィアロ型に形成され、初め無色、長楕円形ないし紡錘形、単胞、平滑(図2中央)、発芽時には褐色を帯びて2~3細胞になるものが多く(図2右)、大きさは10.5~18.1 $\times$ 4.8~7.6(平均15.6 $\times$ 6.2)  $\mu\text{m}$  である。
4. 本菌はジャガイモ煎汁培地上で生育が速く、初め白色ないし灰白色、後に灰黒色の気中菌糸に富む菌叢を呈し、ブラックライトブルー(BLB)照射下で分生子殻の形成が認められる。本菌は15~35 $^{\circ}\text{C}$ で生育し、生育適温は25 $^{\circ}\text{C}$ である(データ省略)。

## [成果の活用面・留意点]

1. 本病に対する登録薬剤はないので、伝染源対策として罹病葉を集めて土中に埋める。
2. 「蓬萊柿」以外の品種での発生は不明である。

[具体的データ]



図1 イチジク「蓬莱柿」の葉枯れ症状（左）と葉柄の病斑部（右）



図2 葉柄上の分生子殻（左）、分生子（中央）、分生子の発芽状況（右、分生子が褐色で2～3細胞となる）

表1 分離菌のイチジク葉柄への病原性

供試菌株	有傷 <sup>z</sup>	無傷
No. 0701-1	4/5 <sup>y</sup>	4/5
No. 0702-1	5/5	5/5
対照	0/5	0/5

<sup>z</sup>ピンセットで穴をあけた後に接種

<sup>y</sup>発病葉数／接種葉数

[その他]

試験研究課題・事業名：病虫害・生育障害の診断と対策指導

予算区分：県単

研究期間：平成19年度

関連情報等：平成20年度日本植物病理学会大会（講要）